

『学び合い』の授業における立ち歩きの頻度と理解の関係に関する研究 —中学校第1学年理科の授業を事例にして—

○小池 佑貴^A, 三崎 隆^B

KOIKE Yuki, MISAKI Takashi

信州大学教育学部理数科学教育専攻^A, 信州大学教育学部^B

【キーワード】『学び合い』, 立ち歩き, 中学校理科, 成績, 理解度

1 はじめに

現在、西川らが提唱する『学び合い』の実践が広がっている。この『学び合い』の授業では子どもたちが相互に関わりながら学習に取り組み、席を離れ立ち歩き学ぶ姿を見ることが出来る。この立ち歩きについて、西川(2004)では立ち歩きは子どもたちの学びを活性化するものであることが述べられている¹⁾。また、石崎・西川(2004)では子どもたちは立ち歩きを活用して適切な情報を選択し、学習を進めていくことが明らかにされた²⁾。

本研究では、『学び合い』の授業における立ち歩きの頻度と理解度との関係を中学校1学年の授業を事例にして明らかにする事を目的とする。

2 調査方法

1)調査対象

『学び合い』の授業を行っている公立中学校第1学年35名(男子17名,女子18名)

2)調査実施期間

平成21年2月25日～3月9日

3)対象単元

身の回りの物質(全2時間)

大地の変化(全5時間)

4)調査方法

本調査では筆者が当該校へ行き、調査を行った。毎時間、ビデオカメラで対象者の活動の様子を記録し、授業後に筆者が作成した授業内容の理解を問うアンケートを理科担当教諭に依頼し対象者全員に対して実施した。

3 分析方法

(1)分析1 立ち歩きの頻度と理解度について

まず、記録された活動の様子から、対象者一人一人の立ち歩きの回数を数えた。本研究で立ち歩きとは、石崎・西川(2004)の考えに準じ、活動時間中において、情報を求めるために各授業の課題を聞き活動を始めた場所から離れる行動と定義する³⁾。また、立ち歩きの頻度とは、活動時間中における立ち歩きの回数のことを意味する。

次に、各授業の生徒の理解状況を授業後に実施したアンケートを用いて分析した。各時間に教師より提示される課題に対して、評価基準を筆者

が作成した。そして、その評価基準からキーワードを設定した。キーワードとは、評価基準を満たすために特に重要なこととして、調査校で用いられている教科書(東京書籍「新編新しい科学」)から各授業で該当するページを参考として筆者が設定したものである。アンケートの記述と設定したキーワードとを照らし合わせて対象者が記述したキーワードの数を数え、キーワード1つを1点とし、得点を求めた。本研究ではこれを理解度とする。

これらの結果を集計し、ピアソンの相関係数を求め、授業ごとに立ち歩きの頻度と理解度の関係を検討した。

(2)立ち歩きの頻度と成績との関係

理科担当教諭に依頼し、4月からの定期テストの結果をもとに、生徒の成績を上位、中位、下位に分類し、それぞれを上位群、中位群、下位群とした。各授業について上位群、中位群、下位群の間で立ち歩きの頻度について分散分析によって検討した。

3 結果と考察

(1)立ち歩きの頻度と理解度について

各授業とも立ち歩きの頻度と理解との間には5%有意水準で統計的な有意差は認められなかった。理解した生徒が理解していない生徒に教えようと立ち歩くだけではなく、理解していない生徒が教えてもらおうと立ち歩こうとしていることが考えられる。

(2)立ち歩きの頻度と成績との関係

成績の上位群、中位群、下位群によって、立ち歩きの頻度に違いは認められないことが明らかとなった。この結果から、成績に関係なく、各授業において一人一人が必要に応じて立ち歩こうとしていると考えられる。

参考文献

- 1) 西川純:『座りなさい!』を言わない授業,東洋館出版社,pp.18-29,2004。
- 2) 石崎隆,西川純:「立ち歩きによる学び合いの発展に関する研究」,臨床教科教育学会誌 vol.3, No.1, pp11-35,2004。
- 3) 前掲書 2)。